



最新聞を手にして講演する
中嶋教授

島中アジア調査会常務理事の講師紹介

本日は、東京外国語大学教授、中嶋嶺雄先生をお招きいたしました。

中嶋先生のご経歴をご紹介申し上げます。

中嶋先生は、昭和十一年長野県松本市の生まれで、今年五十三歳でございます。昭和三十五年、東京外国語大学中国語学科を卒業、同四十一年東京大学大学院を修了、社会学博士です。

昭和四十四年から四十六年まで香港総領事館の外務省特

—今の体制で巨大な中国を維持するのは無理—

中国はどこへ行く

緊急講演会

なか じま みの へい
中嶋 嶺雄

(東京外国語大学教授)

別研究員として勤められ、五十二年から一年間、オーストラリア国立大学客員教授、五十五年から一年間パリ政治学院客員教授を歴任されました。

現在、日本国際政治学会理事、アジア政経学会常務理事、環太平洋協力日本委員会委員などをつとめられているほか、私どもアジア調査会の常設研究機関でありますアジア研究委員会の幹事でもございます。

皆さまもご承知の通り、中嶋先生は現代中国研究の第一人者といわれ、特に文化大革命では、文革礼賛の学者も多かった中で、文革を一貫して権力闘争として分析、今日ではその正しさが証明されております。

これらの文革を当時において冷静に観察し、正確に分析した評論を集めました「北京烈烈」——これは筑摩書房から出してありますが——は、一九八一年度のサントリー学芸賞を受賞いたしました。

また、先生は、最近では「中ソの戦略 日本への選択」「中国に呪縛される日本」「二十一世紀は日本、台湾、韓国だ」「ゴルバチョフ ソ連の読み方」などの著書が続々と出版され、新聞、テレビなどマスコミでも縦横のご活躍をされていることは皆さまもご承知の通りでございます。

私は、先生の研究室をお伺いしたことがございますが、中国に関する世界中の新聞、雑誌、論文などの膨大な資料が保存整理されており、たとえば「鄧小平」という引き出



熱心に耳を傾ける会員たち

中嶋東京外語大教授の講演

取り返しのつかない悲劇的結末

中国は、ご案内のように、六月四日の「血の日曜日」という、あつてはならないような大変な事態を実際に断行して、この春以来の民主化運動に一つの結末をつけた。しかも非常に悲劇的な、取り返しのつかない形において、ああいう結末をつけたわけですが、それでドラマが終わったとは思わないわけで、今、中国は第二幕、ある意味では血の

しの中には、年度別の膨大なデータが保存されているなど、新聞社の調査部も頗る負けのデータを整えられております。

また、先生は、これまで中国を九回訪問されて、実地調査を行うなど、克明な裏付けと鋭い洞察力の下に、現代中国論を展開されております。先生の中国の予測や見通しが的中する精密も、ここにあると考えられます。

それでは、これから「中国はどこへ行く」と題して、六・四血の天安門事件、趙紫陽総書記の解任、中国国内への締めつけと恐怖政治、さらには最近の中国情報をもとに、今後の中国の見通しについて先生からお話をしていただきます。

犠牲にまさるとも劣らないような大変な恐怖政治が断行されているわけです。

このところ、外国からの厳しい批判、あるいは今回のアルシュ・サミットにおける中国に対しての強い批判等もあつて、外見上は少し柔らかない感じになってきているかに見られるが、これはいわば一生懸命「作り笑い」をしているということとして、相変わらず逮捕、摘発が次々に進んでおります。

進む中国内の「恐怖政治」

私共の知っているような社会科学学院の学者であるとか、あるいは皆さま方の恐らく懸念にされているような人たちが、今次々に摘発されておるわけですし、すでに七千名ぐらいが逮捕されたと言われております。この数は、当初一万名ぐらいのリストが用意されていたといいますが、さらに大幅に上回るのはないかと思ひます。

現に死刑執行その他も、あのようなみせしめの形は一時中断しているものの、依然として進んでおつて、つい最近も新しい多くの知識人たちが指名手配されているわけですから、そういう意味で中国の国内政治は、まさに恐怖政治そして、ひとたび権力があつた形で行使すると、中には従来の立場をかなり捨てて、新しい強権派に迎合する人たちもいろいろ出てきております。そうした中で、ご

承知のように「密告制度」が奨励されたりして、まさにジョージ・オーウェルが「一九八四年」で描いたような恐怖政治が続いていると考えざるを得ません。

そうであるが故に、外に対しては、最近非常に操み手をして、学者レベルでも、あるいは企業その他にでも、従来以上に笑顔を作つて見せているようです。ここに私は二重の意味で非常に多くの問題があるのではないかと……と。

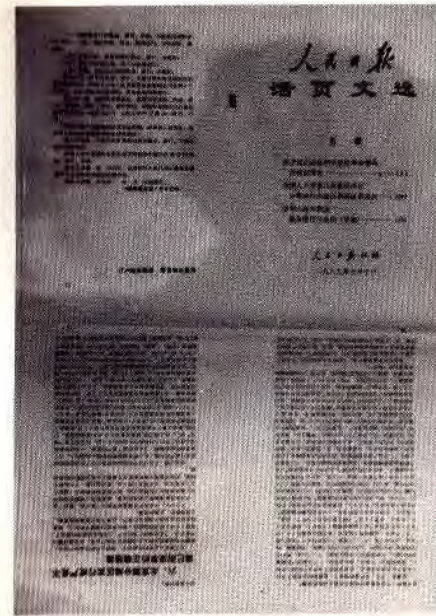
決定的材料の「人民日報」特別付録

さて、そこで、この一連の事態を振り返りながら、いくつかの要点を述べ、全体像を描いてみたいと思います。

もちろん新聞報道、あるいは今回はテレビその他がいろいろ現場からニュースを伝えておつたし、いくつかの壁新聞——こういうもの（示しながら）も大かた手に入りつつありますが、そういうものも材料になります。

もう一つ決定的な材料は、七月十日に人民日報が、特別付録としてここにございますように、今回の事態の当局側の非常に詳しい経過報告を発表しました。私も読みましたが、これは北京市長の陳希同が、六月三十日に詳しく内情を述べたものでして、そのあたりの経過を批判しながら分析してみると、全貌が浮き上がってくるような気がします。もちろん、今の中国当局は、今回のこの経過報告にもあるように、趙紫陽反革命集団というものがいかに広範に、

しかもいかに用意周到に陰謀を企てていたかということが冒頭から書かれています。たとえば、香港に「九〇年代」という雑誌とか、あるいは「新觀察」——中国のニューウェーブを代表するような雑誌。上海の『世界経済導報』。これらの開明的な雑誌、さらに『人民日報』、香港の『文匯報』、『北京日報』等々のマスメディアもこの反革命集団の一角を構成し、それが方励之とか、社会科学学院の蘇紹智とか、パリに逃れた嚴家其（政治学者）とか、そういう人たちが結託して、まさに中国を資本主義の方に持って行くという大陰謀が行われていたんだ、というような筆致



「人民日報」付録の文章選集

で書いているわけです。

同時に、この陳希同市長の詳しい経過——いつ何日にどういうことが起こったという当局側の手から非常に詳しく書いてある——を見ると、今回の事態は、党中央の中、あるいは国務院の中に、二つの司令官が存在したというふうなわけに受け取らざるを得ないような状況です。

それから例の「四通公司」。これはハイテク産業を中心に急速に伸びてきた企業ですが、その社長なども、今逮捕状が出ているようでして、こういう改革と開放にリンクした新しい企業集団というのも、すべて「一味徒党であった」というようなことが出ております。

ちよつと今、毎日新聞の平野主筆にも申し上げたのですが、日本の新聞をここで批判するのはちよつとまずいんですが（笑）、こんな重要な——これをそのまま要旨だけでも翻訳すればいいわけですが——ことを、どうして新聞が報道しなかったかと思えますね。この経過は、大きな活字が躍ったのですが、そのフォロー・アップとして、こんなものこそ資料として翻訳すれば……とにかく当局側からする全貌がかなり明らかになると思うわけです。

事態の本質は「反・革命」だった

さて、それら当局側の材料、その他の材料を総合して、私もこの間必死になっていろいろ分析もし、考えもしてい

るわけですが、問題のポイントは、今回の動きは、たしかに鄧小平の言うように、ある意味では反革命であったというふうに考えていいのではないかと。

それは、鄧小平が、あるいは今の強権派が言うように「反革命陰謀集団」ということではなくて、中国共産党の一派支配、あるいは今日のような経済の腐敗と混乱、そういうものに對して、真向うからの批判が澎湃として起こってきた。そういう意味で「カウンター・レボリューション」であったと思います。「カウンター・レボリューション」というものを、「反革命」という批判のレッテルとしてではなくて、まさに中国を作り変えようというような、そういう意味での「反・革命」というものがやはり事態の本質であったと思うのです。

アメリカの『タイム』は、六月十六日号に「リポルト・アゲインスト・コミュニズム」と表現しておったけれども、まさに事態の本質はそこにあった。

強力なリーダーシップを持たなかった学生

ただ、学生たちは、自分たちがそういうような恐るべき反革命として、はつきりした目的を持って自分たちの政權を樹立するんだというような形で今回ああい運動を起こしたのではなかったということも事実です。したがって、強力なリーダーシップ、あるいはリーダーがなかった。こ

承知のように北京師範大学の女性リーダーの柴玲とか、パリに逃れたウーアルカイシー（北京師範大生、ウイグル族）、それから北京大学の王丹——彼はついにつかまりました——、こういう指名手配された二十一名の学生運動のリーダーもいたわけですが、これは所詮、学生運動。特に「高自連」——「中国高校（大学、専門学校）自治連合会」——という新しい自主学生組織はできたものの、とても軍事力を持つていて共産党を転覆させるというほどのものでもありません。しかもリーダーシップ、あるいはリーダーも欠き、ある意味では組織論もなかった。それから、彼らの不満をどういう形で表現するかという明確な用語も持つていなかったと思います。

鄧氏が怖かった、共産党政治は「ゴメン」

そして、本来そういう革命であれば（反革命にせよ）、戦略と戦術が必要ですけども、デモをどういうふうに広げるかということについては非常に冷静に知恵を絞ったけれども、もちろん今の中国共産党を転覆させるというところまで展望を持っていたわけではない。したがって、今回の運動は挫折し、抑圧される宿命にあったわけですが、しかし、なぜあそこまでこんな運動が広がって行ったか。単に北京だけではなく、全中国津々浦々にまで一時は澎湃たる大きな民主化運動が広がって行ったということの本質に

は「もう共産党の政治はごめんだ」という暗黙のコンセンサスがあったということ。これは今後の中国を考えるうえで、非常に重要なポイントだと思います。

であるが故に、ある意味では、鄧小平氏はそれが怖かったんですね。ですから、彼にとつては、これは抑圧する以外の何ものでもない。ですから、鄧小平氏はその点で非常にきめていたということも言えるし、リアリストであったというふうにも見るができます。

もちろんこういう形で強権を行使した中国が、今のようない体制で果たして今後やって行けるか、差し当たり経済はどうなのか、ということはこれからお話しするように、非常に難しい。国民から見放され、学生や知識人からあんなに反発を買い、そして今みんな強硬派に恐れおののいておりますけれども、そういう権力が、軍事力によって辛うじて支えられているに過ぎない。そして、いよいよポスト鄧小平という問題が、時々刻々と迫ってくるということを考えると、今の強硬派のリーダーシップそのものは、いつ瓦解するかも知れないという基本的な脆弱性を持っていると考えます。

したがって、今後中国は、まだまだ大きな変動、あるいはいろんな問題が起こり得るというそういう不可測性の中にますます投げ込まれた中国であるというふうに申し上げざるを得まいと思います。

体がうまく行っていなかったということですね。

ここに実は、二重の意味で深刻な問題があった。今の強硬派が、辛うじて武力で抑えているけれども、今度は趙紫陽になれば中国の経済、社会がうまく行くかということ、実はそうではない。そうでないことが一方で証明されていたところに、二重の意味での救いのなさがあるような気がします。

活性化はしたが、闇市経済に

ご承知のように、最近のインフレはものすごく、この第一四半期だけでも二八割、しかも自由市場の価格はこの統計の中に入っておりませんから、公定価格だけ。自由市場の価格も入れると、五——六〇割というスーパージンフレです。そもそもこれも実は鄧小平にも責任がある。一九八四年に人民公社を解体して、生産請負い制を実施した。このときに、農民を喜ばせるために、農作物の統一買付け価格を大幅に引き上げているわけでして、そうすれば当然国家の財政に負担となって赤字になる。その分、人民元を増発するというようなことをやってきた。

そういう悪循環が続いてきたうえに、最近では通信の流通量が増えすぎておったが、これにはいろいろの意味がある。

一つは国家財政の大幅な赤字が累積されてきているから、

破綻寸前の十年の改革・開放

そこで、今回の経過をざっと見ると、まず第一に次のようなことが言えると思います。

過去十年間の改革と開放の政策も、決して順調ではなかったし、それどころか破綻寸前であったという状況がごさいます。

もしも、改革と開放によって多くの中国の人たちが満足していたならば、その受益者であったならば、これほどの不満の爆発というのはなかったわけです。

そもそも改革と開放を鄧小平が路線を敷きながら、それをまず胡耀邦、そして趙紫陽にやらせる。それは当然今の共産党体制を崩り崩しかねないような西側からの影響であるとか、市場メカニズムの導入であるとか、そういうものが出て来ますから、それは自ら危機を招くことになるのですけれども、そのことの責任をこういう形で、胡耀邦、趙紫陽の失脚という形、しかも学生を武力弾圧という形で行っているところにそもそも大きな矛盾があることは言うまでもございません。

特に経済なんですが、私はエコノミストではございませんが、とかくこれまでの中国過去十年間を過大評価していたのではないかと気がします。

ということは、趙紫陽の政策——特に最近はい——それ自

それを補填するために、このところ毎年対前年比三〇割増ぐらい紙幣を刷っているわけです。特に、この三月は、三百二十億元という人民元を発行しています。これは国家の歳出、歳入……要するに国家の予算の歳入の四分の一ぐらい人民元を刷っているわけですね。三月というのは特にひどかった。これはもうものすごいインフレになることは明らかです。経済はたしかに活性化したが、その代わりに、中国社会全体が、いわば「闇市経済」のようになってしまった。

そうすると、この混乱と活性化の中で、うまく立ち回って行く人たちは、ますます利益を得て行く。貧富の差が増大する。そして一部の幹部の特権……いわゆる「官倒」現象、官僚ブローカーが輩出するとか、そういう問題がいろいろ出て参りました。

幹部・一族郎党の腐敗現象

そうした中で目立つことは、共産党の幹部の一族郎党がすべてのいい職、ポジションを牛耳っているという腐敗現象です。

これは(示しながら)、北京大学で出た壁新聞ですが、ご承知のように鄧小平の息子の鄧模方(モホウ)は文革のときの犠牲者で身障者です。日本にも車椅子で参りました、中国身障者福利基金を利用して不正を働いてきた。いわば、人道主義

を売りものにして巨万の利益を得たとか、お父さんが郭小平ですから、それをいいことに、東海艦隊の船を三隻払い下げて——これは壁新聞が書いていることで、どこまで信用できるかわかりませんが——アメリカの銀行に十億米ドル、スイスの銀行に三十億ドル……米ドルで貯金してあったとか、そういうようなことが言われる。これは話半分に聞いても、かなりそういう現象が起こっていたであろうことは予測がつきます。

ご承知のように、鄧樸方は「康華発展総公司」という中国の新興企業集団の代表のような、一種のコングロマリット、総合商社の理事長でして、これはあまりにも官倒現象、腐敗がひどいというので、昨春秋、ご承知のように国務院と党中央は、この康華発展公司のすべての貿易取引を中止させた。こういうことがあまりにもひどかった。鄧小平の娘とか、みんなそれらの人たちも同じようなことをやっている。

趙紫陽だって同じことでして、息子の趙大軍は「海南華海公司」副総裁であるとか、娘が北京の「長城飯店」の副支配人であるとか、そういう現象があまりにも目についたということもございましょう。

すべての党幹部がそうだということができるぐらい……。かつて人望のあった葉劍英なんかも、息子（葉選平）が広東省長であるとか、あるいは、深圳の副市長であるとか、

それから黒竜江省は、ご承知のように中ソ関係が改善されて、百万の労働力がソ連沿海地方に輸出されるということになっていたわけですが、それを聞きつけたのか、数十万人の人が黒竜江省になだれ込んだ、こういう現象がこのところあちこちで起こっている。

私も昨年の夏、まさにグラスルーツを歩いて大変な思いをしたけれども、一日数千万が動いていると推定されるわけで、汽車に乗ること、切符を買うこと、駅の混乱、もう本当にひどいものなんです。

ですから、そういう現象がずっと一方存在してきたことを指摘しなければいけませんし、そういう経済の混乱の中で、にもかかわらず一人当たりのGNPが大幅に伸びて、中国全体が一人一人が豊かになっていけばいいのですが、過去十年間GNPそのものは成長しているわけですが、人口増がこれを上回るわけで、結局パーキャピタのGNPはほとんど横ばい。僅かながら成長している……。それも最近のインフレその他でそんなものどこかへ行ってしまう、生活はもっと苦しくなっているというのが平均的な中国の実感だと思うのです。

中国にあまい研究者やレポート

中国人というのは、平等の競争原理の中でマネーメーカーングをするとか、富を得るということについては意外に寛

一族全部がそういう状況。

ですから、学生たちにとっては、趙紫陽も含めて、今の状況の中で、幹部の腐敗墮落は目に余るじやないかというある種の正義感にかられたことは言うまでもございせん。

ものすごい民衆の移動現象

そして一方、貧富の差は増大しておるし、北京の学生たちはそういう特権を利用しない限り思うところへも就職もできない。一般のそれ以外の大学の学生は、国家配分によってどこへやられるかわからない。

こういう状況が、全中国闊市経済化の中で非常に目立っていたということです。

それからもう一つは、ご承知のように、最近の中国は、非常に民衆の移動が激しくなっています。この移動の激しさというのは、従来の閉鎖的な中国になかった新しい動きです。これは、ちよつとでもあちらに行けば利益が多いということで、みんなそつちへ殺到するという社会不安の反映なんです。

ニューヨークタイムス記者の報告によると、この旧正月が終わって、四川省、湖南省から広東へ一日十万人、合計二百数十万人が押しかけて、広州に行けばメシが食える、金がもうかるとやってきた。まさにパニックになりました。

大な民族です。しかし、今の中国を見てみると、一部の幹部とか、都会の周辺で換金作物ができる万元戸とか、そういう選ばれた層だけがますますよくなって行くという不平等があまりにもひどかったということがありましよう。そして、経済全体は非常に低い水準で低迷している。過去十年間をとると、台湾や韓国の成長は、ものすごいカーブで伸びているが、中国はその点で非常に横ばいである。

こういうことを考え、そして今の混乱を考えると、このところ中国の経済はうまく行っていたというのは——そういう議論も日本のエコノミストの方にもあったのではないかと思いますし、シンクタンクとか、銀行の調査部とか、そういうレポートが多かったと思うが、私は、これはどこの国のことかなと感ずるぐらい違和感を覚えました。

アメリカでも、実はそういうふうな見方があった。ミシガン大学のマイケル・ルクセンバークが「ニューズウィーク」でも言っていたように、「アメリカの中国研究者は総ざんげしなければいけない」……。たしかに甘かったですね。特に米中接近とか、中国へのシンパシーがありましたから。私はアメリカでいつも議論していた。どうしてこんなに甘いのかと思うぐらい甘かったです。それらの人たちは今回の事件によって逆にもものすごい反発をしているわけです。それから、皆さんもお読みになったヘンリー・キッシンジャーから、ポール・ケネディに至るまで、ああいう戦略

論をやる人、文明論をやる人は、やはり大きなことを考える。私も大きなことだけ考えられるような中国であつてほしいのですが、非常にある種のロマンの中で中国を語るために、「二十一世紀は中国の世紀である」ということを言っていましたね。それはあたかも、シルクロードや万里の長城。つまり文明の遺産を見て、現代の中国を推しはかるようなものであつて、現実の中国社会とは全く関係がない。現実の中国社会は、ご承知のように日本列島の三倍ぐらいの有効居住スペースしかない。しかも農業人口は依然として八〇割ですから、畑をとっておかなければいけない。都市、及びその周辺はものすごい過密の状況の中で、どの切片をとつても、人、人、人がうごめいて、ひしめき合っているような状況ですから、ストレスが多いし、大変な社会だろうと思いますね。

急ぎ過ぎから、整理整頓、時代へ

だから、そういう社会の現実を見ると、やっぱり中国の改革と開放は、どうも急ぎ過ぎ、行き過ぎの弊害が一方出てきて、大変な混乱を招いていたと思います。これがやはり今回の事態の一つの重要な背景なんですね。そこへ持ってきて、昨年の秋ぐらいから、これを軌道修正する方向が出て参りました。それは同時に趙紫陽氏のリーダーシップが後退したということですね。

(反体制作家)、これらの人の釈放運動を始めた。特に五四運動、あるいはフランス革命ということで人権問題。それから民主化。こういう問題を掲げて、公開書簡を発表して、多くの知識人がそれに署名していました。それは、科学者とか、自然科学者とか、いろんなレベルの公開書簡が、一月、二月、三月、一斉に出て、すべて党中央と國務院に向けられていたわけです。

まずかった党中央の胡氏死去への措置

こういう背景の中で胡耀邦が亡くなった。ですから、胡耀邦の死は一つのきっかけではあるが、胡耀邦の死だけこんな大きな運動が起こったとは思われない。私が申し上げたようないろいろの不満なり、どこに火をつけても燃え上がるような矛盾が、もう爆発寸前にあったという気がします。

胡耀邦が亡くなる——この死に対して、党中央の処置は非常にまずかったと思うのです。ご承知のように李鵬は日本にいて、胡耀邦の死を完全に過去の人物の死として扱うような冷たいステートメントを発表した。公式日程が終わっていたにもかかわらず、急遽予定を変えて、彼の追悼のために帰国するなんてこともしなかった。この李鵬の滞日中の発言も、学生を非常に刺激します。

そして、四月十五日の胡耀邦の死から、まず中国の学生、

それで、この三月から四月上旬にかけての全国人民代表大会では、李鵬が中心となつてご承知のように「調整と整頓」という名の引き締めを、今後数年もしくはさらにそれ以上にわたつて断行するという非常に強硬な決定がなされた。それは「沿海地区経済発展戦略」であるとか、アジアNIESとリンクした中国の経済を考えて行こうというような趙紫陽型の開放政策は、もう影も形もないような状況で新しい引き締め政策が断行されようとしていた。

これに多くの中国の知識人や学生は、「もうたまらない」という感じを持っていたと思います。改革と開放をやつてこんなに混乱する。そしてしかも、今度は引き締めである。そうしたら一体今度どうなるのか。果たしてそれでうまく行くのかという不安もあったし、肝心の政治改革、民主化も、これではとてもではないという絶望感があった。

大きな節目の中の反体制指導者の動き

今年のご承知のように、中国にとっては、非常に注目すべき年です。建国四十周年、そして五四運動七十周年、またフランス革命二百周年という三つの大きな節目に当たります。

そこで一月ぐらいから、先ほど申し上げた方励之とか、蘇紹智とか、そういう知識人が中心となつて、特に今から十年ぐらい前の、民主化の犠牲となつて獄中にある魏京生

政法大学の学生がきっかけとして花輪を捧げるが、それに刺激されて、北京大学の学生約三千名が動く。

鄧小平氏の「動乱」講話

ここから一つの大きなうねりが始まります。

四月十八日。

ここも一つの小さな節目ですが、中南海の新华門に学生たちが押しかけて官憲と揉み合います。そのことがまた輪を広げる、というような形になって行く。

そして、四月二十二日の胡耀邦の葬儀。これは趙紫陽も学生の期待通り胡耀邦を再評価したわけでもない。ですから、趙紫陽の限界というか、彼自身胡耀邦追い落としのときには、鄧小平と一緒に自分があとがまに座ったわけですし、学生と趙紫陽の間にはかなり溝があったと思います。学生たちは趙紫陽のことも批判していました。それが最後には一体化するということに今回のドラマがあるわけです。

こうした形で運動が盛り上がる中で、四月二十五日に鄧小平は「これは動乱である」という大変強硬な講話を行います。(四・二五鄧小平講話)

趙氏の態度変更が、第一の罪状

この間、趙紫陽は北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)に

行っていて、北京をあげるわけですが、翌二十六日に「動乱」規定の人民日報の社説が出る。趙紫陽にも、党の最高責任者ですから、電報で連絡した。彼は、そのときは「これでいい」と言っておきながら、四月三十日に帰ってきて、この態度を変更した。それが趙紫陽の、こういうもの（人民日報付録）を見ると、第一の罪状になる。

こういう形で、このあたりから、党内の路線闘争が、学生運動をめぐってかなり激しくなる。今まで経済改革の失敗の責任をとらされて、カゲの薄くなっていた趙紫陽が、ちよつと違った動きを始める。つまり新しい挑戦を試みるということになる。

アジア開発総会で趙氏が中央対立の談話発表

その次が五月四日です。

五月四日は、ご承知のように五四運動七十周年記念ですが、この日はもう一つ大きなハブニングが北京でありました。アジア開発銀行の総会です。皆さま方の中にも関係者あるいは行かれた方もいらっしゃるでしょう。台湾からは四十年ぶりに郭婉容女史（大蔵大臣）が団長となって、代表団が行った。戈媛ですし、日本語もよくできる大変な人ですし、彼女の人柄もあって非常に人気を博した。台湾、香港、あるいは東南アジア諸国から、多くのジャーナリスト、特に華人のジャーナリストが行った。

中身の濃い中ソ首脳会談

ゴルバチョフは五月十五日に中国にやって参り、十六日の午前十時二十分から鄧小平・中央軍事委員会主席との首脳会談が行われた。この首脳会談は、皆さまもテレビでご覧になったと思いますが、私は非常に中身の濃いものだったと思います。

冒頭から「ルーマニアのチャウシエスク大統領を通じて、中ソ和解の三条件を打診したのだけれども、あなたのところにメッセージが行っていますね」と鄧小平が言うと、ゴルバチョフは「ちゃんと受け取りました。私たちは毎年一つずつ障害を克服してきました」。つまり、例の中ソ和解三大障害は、私がかねてから申し上げましたように、西側に對する一種のプレゼント・カムフラージュであつたわけで、中国側はそういう措置を講じていたわけです。特に、この五月十五日、中ソ首脳会談に合わせて、モンゴルからの撤兵が開始されました。大体五万数千名というモンゴル在留のソ連軍。私も二度モンゴルに行つて、非常にソ連のプレゼンスの大きかったことを覚えていますが、それを一つ一つ細かい数字をあげて、ヘリコプターとか、トラックとか、全部引き揚げるということになった。そして、この一兩年のうちに、（当初三分の二）完全にモンゴルから撤兵する、と。

このとき、趙紫陽が、アジア開発の代表に談話を発表します。これが当局側から言う「趙紫陽の第二の五四談話」と言います。趙紫陽氏はここで党中央の決定と真正面から対立する談話を発表した。つまり、学生たちの運動を評価した。

これによって運動がさらに新しい段階にふくらんだ、と書いてあるわけです。そういう事態がございました。

中国のハンスト＝絶食宣言は特別な意味

それに続いて、五月十三日からハンストに入る。ハンストというのは、日本でハンストをやったというと、「まあ、よせばいいのに」とか、半ばある種の政治的嫌悪感を伴うのかも知れませんが、中国人の場合、ハンスト＝絶食宣言、絶食請願団。この「絶食」という言葉の持つ意味は、まさに特殊中国的文脈で考えなければいけないわけで、非常に共感を呼んだ。とにかく食べるものには貧欲な中国人に、若者が食を絶ったということは……。

そしてこのデモが広がり、同情が広がって行った。

そのころは、もうすでにゴルバチョフ書記長との会見、つまり、世界のジャーナリストが千人以上集まってくるようになっていたから、それもあって、大変な高揚になって行くわけです。

意外に気付かれていませんが、ユーラシア大陸の内部に、ある種のこういう軍事緊張があつたことを除かれることがもたらす北東アジア全体に対する影響力は、かなり大きいと思います。

そういうようなことが冒頭からあって、しかもこの鄧小平・ゴルバチョフ会談で、中ソ関係は完全に正常化した。それは、党と党との関係を含む正常化であるということになった。

鄧氏が感極わまつた瞬間の中ソ和解

考えてみると、鄧小平にとっては、まさにこの瞬間、本当に感きわまつたような瞬間であつたかも知れないと思います。

なぜならば、彼は中ソ関係にかかわり合つたのは非常に古くて、一九五六年の二十回大会（スターリン批判が行われたソ連共産党二十回大会）に、鄧小平が出ているのです。ね。スターリンの個人崇拜、偶像崇拜、スターリン独裁というものが、ガタガタと首を立てて崩れて行くその瞬間を目撃した数少ない生き証人です。やがてこれを契機に中ソは論争する。そして六〇年代の初頭には、中ソ論争の中国側イデオログとして、彼はモスクワに乗り込みます。六三年の夏に、スースロフとの会談が決裂して帰ってきたときは、毛沢東、劉少奇、周恩来、すべての中国首脳が鄧小

平を凱旋將軍のように迎えた。

しかし、やがて毛沢東と彼はたもとを分かつ。毛沢東のように、ソ連を戦略的な敵とみなして、全面的にソ連と対決することを中国の最優先の戦略だというふうに考えることはしなかった鄧小平は、修正主義者だと言われる。劉少奇、鄧小平打倒の運動が起ります。

そして、内なる修正主義を打倒するために、ソ連に対しては「社会帝国主義、覇権主義を徹底的に粉碎する」といういわば文革中の対ソ対決路線が固まる。当時、毛沢東、林彪、この二人の党主流派が中心となって、ご承知のように「人民戦争の勝利万歳」を呼号し、六九年の中ソ国境衝突にまで至る。やがて文化大革命の中で、鄧小平は再び三度失脚し、その文革の十年を過ぎて、ようやく非毛沢東化を実現し、非毛沢東化と共に中ソ和解を実現した。

ですから、私は、中ソ和解ということを書いてきたのは、中国の内政と外交とのリンケージの高さからすると、国内政治において毛沢東を否定しておいて、毛沢東の世界戦略は正しいということはあり得ない。だから、そのころから中ソ和解の可能性を私は申し上げざるを得なかったわけですから。

その瞬間、広場は「鄧打倒」の百万人大衆

その瞬間が、まさに五月十六日に突った。

しかも、世界のスター、ゴルバチョフも、鄧小平の前では、まさに教授の前の生徒のように見えたり。あの小さな鄧小平の方がはるかに貫録を示しましたね。

ところが、その瞬間、ご承知のように、広場には百万以上の群衆が集まって「鄧小平打倒」を叫び始めた。鄧小平としては、労をねぎらってもらって、彼自身は、中ソ和解が成り立ったら、いよいよ引退だというふうに考えていたと思います。

毛沢東と鄧小平の違いは、私はよく申し上げますように、毛沢東は時間の政治学という概念がなかった、鄧小平はいつも時間というものを考えて政治をやってきた人ですから、恐らく「これを最後に」と思っていたでしょう。

ところが、あにはからんや、広場の大衆は「鄧小平ひき下され」「鄧小平打倒」と呼号して、騒然たる状況になってきた。しかも、中ソ首脳会談の場所もあちこち変えなければならぬという状況。

「あなたは一体何者だ？」と群衆

これは鄧小平にとっては全く許せないことである。ますます「彼らは動乱であり、反革命分子だ」というふうに考える。

一方、学生たちは、鄧小平とゴルバチョフを比べてみると、片方はペレストロイカ、民主化の旗手である。それな

のに、鄧小平は何とガンコな、しかも老害まる出しの人物か、と。しかも彼は超法規的に君臨しているじゃないか。

法治ではなくて、まさに人治である。これを打倒しなければ、ということでは「人治を打倒し、法治を要求する」と。

そして「あなたは一体何者だ？」と言ったわけです。これは鄧小平にとってみれば一番痛いところなんです。つまり国家主席・元首でもない。あるいは國務院の総理・首相でもない。党の書記長・総書記でもない。その鄧小平が、中ソ首脳会談すべてを彼が牛耳ったということ自体、法規に照らせばおかしいわけです。しかも、鄧小平は、かつて毛沢東の個人崇拜に悩んで、現行の党規約では、その第十六条に、「如何なる個人も組織、法の上に君臨してはならない」と書いてある。

それは、鄧小平が自ら作った一九八二年の現行党規約なのです。にもかかわらず、彼が皇帝型権力構造、伝統的なカリスマ支配、ある意味では共産党支配の党官僚ぶりとが一緒になったようなガンコな権力を誇示している——それになまらなくなった学生たち、あるいは知識人が真っ向から挑戦したわけです。

趙総書記の「機密漏洩事件」

ところが、この日は午後、ゴルバチョフ・李鵬会談、つまり政府レベルの会談があつて、夕方から趙紫陽・ゴルバ

チョフ会談があります。

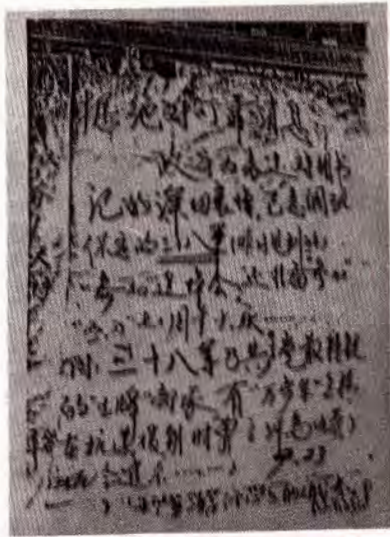
このころは、予定された人民大会堂で会談ができなくて、釣魚台の迎賓館でやらざるを得ない。そんな状況になって騒然としていた。

このときに、趙紫陽・総書記の「機密漏洩事件」というのが起こる。これは、今回のこういう公式文獻でも、さっきのアジア開銀の「五四談話」に次いで、大変な罪状の一つに今後取り上げられるでしょう。

今回、中国は、中央電視台が各首脳会談の冒頭部分を、当初十分間と言っていたが、実際には十数分放映したわけです。その瞬間をとらえて、こともあろうに趙紫陽は、党の最高機密を漏らしたわけです。

何と言ったかというところ、鄧小平氏は一昨年の十三期一中全会（つまり中央委員会）以来引退しました。しかし、われわれは鄧小平氏の経験、その指導から逃れられませんか——ということを書いて、そして「これはあなたに初めて打ち明けること——ニュース（消息）——ですが……」と言いました。消息（シヤオシー）という言葉が、私には聞こえませんでした。たまたまその間、私はNHKの衛星放送の解説をやつて、リアルタイムですつと見ていましたから。

つまり「すべての中国における重要事項の決定は鄧小平氏にゆだねられているのだ」——そういうことを言ったわけです。しかも冒頭からそれと言った。ゴルバチョフ氏は、



北京大学にはり出された38軍行動を書いた壁新聞

その瞬間、上を向いたり、下を向いたり、目をパチクリしていた。

趙総書記、最後の決戦に出る

私は、自分が解説したこともあって、その部分をビデオでもう何回もよく見ているのですが、このとき趙紫陽は顔を上げて言うわけにはいかない。ゴルバチョフの方を見ているわけではない。まさに伏し目がちにその機密を漏らしながら、最後に非常に挑発的、挑戦的に、左コブシをこう上げて（手振り）これを言っているんですね。ということとは、とにかく彼は追いつめられていたし、そして学生運動の評価をめぐっても、意見が対立していた。

ところが、広場には、百万の大衆が「鄧小平打倒」を叫び始めた。ここぞとばかり、いわば最後の決戦に出たんだらうと思います。彼はここで鄧小平と完全に決別。これが大変な問題を引き起こします。

そして学生たちに、そのことが伝わって。つまり、テレビを通じてゴルバチョフに、あるいは広場の大衆に、全世界に、冒頭部分の十数分放映するということを意識して、趙紫陽がそれを書いたというドラマ、ですね。

これはのちに、趙紫陽は鄧小平を放り出そうとしたのだというふうな、ここ（人民日報付録）に書いてありますけれども、こういうことがございまして、そして十七日はゴ

ルバチョフは午前中、万里の長城だけは行った。しかし故宮博物院は見ることができない。「中国に行ったら、あの偉大な中国文化に肌で接したい」と言っていたゴルバチョフは、ついに北京の紫禁城にも、あるいは天安門広場にも足を一歩も踏み入れられなかった。翌十八日、上海に寄って、モスクワへ帰ります。

亀裂が深化した北京中枢

そのあたりから、ますます中国の北京の中枢は非常に亀裂が深化してきます。

十八日の夜から十九日の早朝にかけて、趙紫陽はハンスト学生を見舞い、広場に降りて行って、「自分がここへ来るのは遅過ぎた、あなたの方の言うのは当然だ」といって、彼は感涙にむせぶ。それ以来、趙紫陽は行方不明です、今日まで。

そういうドラマがあったわけですが、このあたりから、もう一つの問題が出てきます。

壁新聞に見る三十八軍の性格

これは、北京の軍の動きだと思っています。

ここに、壁新聞の写しがございます。北京大学に張り出された四月二十三日の壁新聞には、こういうことが書いてあります。ご承知のように三十八軍とか、二十七軍とあり

ましたけれども、その実態がなかなかわからない。私ももちろんわかりません。日本で中国の軍事問題をやっている方々も、実は本当のところはわかっていない。わかっていないというのは当然なんです。

こういうもの（壁新聞の写しを示しながら）、これはかなり信憑性があると思いますが、これによると、「政府は、胡耀邦に対して深甚なる哀悼を表するために、保定に在る三十八軍、これをきのう見た。（という）ことは、三十八軍の幹部が二十二日の胡耀邦の葬儀に出席したということ（です）。三十八軍を追悼会に参加させ、同時に五四運動の七十周年記念の行事に参加させるよう準備している。」

そして（付）として、

「三十八軍は、共産党の最精鋭の王牌（ワンパイ）切り札」の軍隊であって、万歳軍の呼称を持っている。抗米援朝戦争のときには嚇々たる功績をたてた」というふうに書いてあるのです。

これはどういうことかという、三十八軍は、軍近代化の中でも、最も機械化され、技術化された精鋭な軍隊なんです。首都北京一帯を警護、警備するのが目的です。

ここに書いてあるように、朝鮮戦争ですから、本来は林彪系の（彭徳懷に司全官が変わるが）部隊であって、かつて毛沢東に非常に功績があったということで「万歳軍」という呼称を与えられた。この三十八軍は一九八五年から始まる軍の近代化においても、一つのモデル軍として整備されるわけですが、その三十八軍が、胡耀邦を追悼し、五四運動七十周年記念を祝うという部隊なんです。

こういう部隊だということは、三十八軍というものの性格を表している。同時に、北京の状況がよくわかっている。そして自分たちの子弟もデモの中にいるじゃないか、そういう形ですね。

私のところ（東京外国語大学）の留学生に「お母さんは社会科学院でデモに行き、お父さんは取り締まる方だ」なんていう切実な例がありました。そういうことが、わかっています。

そして、この三十八軍は、ゴルバチョフの警備には万全

を尽くす。ところが彼が十八日に帰ってから、学生を排除することを命じられたときに、彼らはそれに抵抗したという問題が出てくる。

これが例の「三十八軍の抗命問題」。鄧小平は、軍の統帥権を一応持っているわけですから、彼にとっては大変なことです。しかも一番強い軍隊です。

長老たちが局面を支配した

鄧小平は、十九日午前中に政治局会議。毎日のように政治局会議が開かれているようです。鄧小平の中南海の家でも開かれている。午後四時という説と、八時という説がある。

政治局員というのは、今、五人のメンバーです。趙紫陽と胡啓立の二人が失脚し、姚依林と李鵬、そして喬石が、初めはあいまいであったが、最後には強硬派に組します。ですから、最後の最後まで政治局の中だけをとりますと、半々に分かれる。

そこへ長老たちが全部入ってきた。今回いかに中国では、長老の貢献が大きかったかということ強調しているわけです。オールド・レッド・アーミーがやっぱり局面を支配した、という感じですよ。

この十九日——戒厳令が出る前の日なんですけれども——そこまでの間に、公式の資料によってもそうですし、わ

です。三十八軍は当然、北京軍区に属するわけですから、北京軍区以外の軍区——北京軍区も行ったという説とそうでないという説があるが——すべてを呼び集めて、叱咤激勵をして、「オレが軍を握っているんだ」ということを言い張ったわけですよ。

いずれにしても、その十九日に、そういう形にギリギリのところ、結局楊尚昆・軍事委員会副主席が出てきて、鄧小平の強い意向だということで徹底鎮圧を決める。

そして、そのときに（中国当局の説明ですと）、趙紫陽は「あなた方とはやって行けないから」と辞表を出した。それに対して、李鵬や楊尚昆は、「何で辞表を出すのか。これはまさに人民の前に、全党の前に、党の中に二つの司令部があり、党が分裂していることを示すものだ。辞表を撤回せよ、と言った」というんですね。

そしたら、趙紫陽は次に「三日間休暇をくれ、と言った」というんですね。

だけれど、それはどこまで信じられるか。実際には、趙紫陽がもう動きがとれなくなった、一種の軟禁状態に陥ったんだらうと私は思います。

この当局の記事（人民日報付録）によると「三日間休暇をくれと言って、三日済んだら、今度は趙紫陽が自分を中心とした政府を打ち立てるつもりだったんじゃないか」ということを言っているわけです。

れわれが得ていた情報でもそうですが、趙紫陽が宣戦布告をしてから、ガタガタと國務院、党中央軍事委員会、人民解放軍の中の総後勤部——総後勤部だけは楊尚昆系統ではないようです。趙南起が部長でして、遲浩田・総参謀長（楊尚昆の娘婿）、楊白冰・軍総政治部主任（楊尚昆の実弟）、みんな楊尚昆の一族ですが……趙南起という人は朝鮮族ですから、楊尚昆の一族ではないと思います。そういうところが、次々に抵抗というか、趙紫陽に加担して行くわけです。

「二つの司令部」ができる

そして、ガタガタと状況が崩れて行った。これ（人民日報付録）によると、國務院の中にも、十数の部（省）は、國務院から離脱して新しい國務院を作ろうとしたとか、北京市に新しい市政府を作る準備委員会ができたとか、現在の政府を打倒して、新しい政権、二重政権状況が生まれる。まさに「二つの司令部」であったということが言われています。それは、誇張はあるにせよ、どうもそういう状況があったと思いますよ。

とにかく表はデモで騒然としている。ひよつとすると、まさに食うか、食われるかで、鄧小平、李鵬がやられるかも知れないという危機感があつた。

鄧小平は、十九日から武漢に行っているという説が有力

いずれにしても、そういう一種のきわどい二重政権状況がガタガタと急速に出てきた。それで、最後はやはり趙紫陽が動きがとれなくなっちゃったと思います。

最後のカケに出た趙紫陽氏

ちょうどそれは、あたかも毛沢東が亡くなって、服喪期間が明ける前日に、華国鋒が四人組をつかまえた。つかまえたから「四人組」になるわけで、それまでは「四人組」なんて言葉もなかった。逆に、あのときに「四人組」が華国鋒をつかまえれば、情勢は逆転していたというような状況が権力中枢にあつた、ということですね。

ここに至って、言ってみれば、趙紫陽が最後のカケを学生運動に彼が加担し、あるいはそれを利用し、それと一緒になることによって、非常にシリアスな状況が出てきたのだらうと思います。

もたついた戒厳令施行

午後十一時（日本時間同十時）から、北京の党、軍、政の緊急大会が開かれる。それはもうテレビにも出ているわけで、そこで李鵬が徹底鎮圧を指示して、午前零時、戒厳令が布かれそうだということになる。

ところが、不思議というか、戒厳令が布かれそうだというニュースが前夜すでに漏れていた。ということは、中国

の中が、分裂していて、意識的に外部にリークする動きもあったわけだ。

実際に戒厳令が出たのは、五月二十日午前十時、ここまでも、かなり時間がかかっているわけです。これは、私は、かなりいろんな抵抗があったと思うのです。

戒厳令が施行されたにもかかわらず、ご承知のように軍が動かなかった。本来、戒厳令を出したら、一斉にあのくらしいの学生たち——もう十八日を過ぎると、学生数は少なくなる、ゴルバチョフが帰りましたから——を排除するのは容易なのに、それは動かなかった。

六日目にやっと戒厳軍令を支持

今回の動きを見てみると——私は軍のことはあまり詳しくないのですが、常識的に見て三十八軍とか、北京衛戍区の部隊が、やはり学生とすしすちゅう接しているし、これがやはり抵抗したのだらうと思います。

何と、北京軍区が最終的に戒厳令を支持するのは、戒厳令施行後の二十五日ですから六日目なんです。これは非常に深刻な問題だと思います。つまり、北京軍区というのは、全体的に一番開明的な軍隊であって、今のどちらかというと改革派に加担する人たちが多かったはず。その主力である三十八軍がそうである。

そこで結局、鄧小平や楊尚昆は、二十七軍というあの「私

兵」のような軍隊と一緒にたてて事態を開いた。そういうのが大体のストーリーなんです。

血の日曜日事件の前ぶれ

鄧小平は、五月三十日、ちょうど「民主の女神」が打ち立てられた日に、「流血を辞さず、徹底的鎮圧をせよ」と命令しているそうだが、それが六月四日につながります。

六月四日の事件が起こる前に、一種の挑発行動みたいなものがあって、軍のジープが暴走、市民、学生をなぎ倒して数人の死傷者を出す。これによって学生たちが激昂する。そのあたりから、六月四日の血の日曜日ができやすいような状況になる。

ちよつと状況説明が長くなったけれども、それはこういうもの（人民日報付録）を見ながら、私もわからないところだんだん解明できたものですから。恐らくこれは皆さんも初めてではないかという気がします。

そういうことになってああいう事態になったということを考えて、やはりかなり深刻な状況であったと思います。

なぜ三千の学生排除に大軍を動かしたか

最後には、三千人しか残っていない学生を排除するのに、なぜ十万の兵力が必要だったのか。アメリカの衛星放送、日本の防衛庁あたりもみんなつかんでいるわけですが、約

三十五万の軍が北京周辺にいたんですね。なぜ三千人の学生を排除するのに、三十五万の軍が必要だったのか。いざとなれば、衛戍区の部隊とか、あるいは人民武装警察——これは約百万人います——それでやれたはず。かつての天安門事件のときも徹底的な弾圧があったけれども、あのときは民兵と武装警察、公安がやっている。これで済んじゃうわけです。

それが、まさに正規軍が動いたということは、今日の中国において、それだけの状況があったということです。この辺をよくつかんでおくということは、やはり中国の将来を考えるうえで一つの示唆になるのではないかと。

悪循環で経済はますますひどくなる

こういう状況を考えますと、かなり状況は深刻であった。そして、果たしてこれから中国がやって行けるかどうかという問題です。

まず一つは、財政問題がござります。国家財政は、ただでさえ赤字です。

次に、引き締めをやる。

それから、さっきの「四通公司」とか、新しい新興企業をみんな摘発しようとしている、大体それは改革派です。から。

ということになると、果たして税金が納まるのか。一般

の個人は、八百元以上だと税金を払いますし、企業からも税金をとります。それが大きいわけです。

引き締めをやって、一体国家財政がどうなるか。またそれができなくなると、人民元を発行するんじゃないか……「打ち出の小槌」ですから。

こういう悪循環をすると、経済はますますひどくなると思います。

それからもう一つは、一九九〇年ぐらいになると、私が見ているところ、推計四百二、三十億米ドルの外債を返済していかなければならない。

今のところ貿易収入に対する外債の比率というのは、ラテンアメリカのようにひどくはなくて、まあまあのところですが、これから対外貿易も縮小するでしょう。そうすると、この借金をどうやって返すか。

円借款は、今は二・五パーセントの利子です。この間までは三・五ぐらいがありました。非常に優遇金利ですけれども、それにしたって利子がついている。そのために外債をどうするか。そういう点でも、私は非常に展望が暗いと思います。

膨大な失業者問題

もう一つは失業問題。今、私は数千万の失業者が出ています。この失業問題をどうするのか。等々のこと

を考えると、経済を引き締めたからといって、そのまま順調に行くという保障はない。ますます国際環境が厳しくなる等々の問題が出ておって、やはり中国は大変なことをしてしまった。

香港は九七年には廃墟に？

特に香港は、今ご承知のように、パニックに陥っています。デービッド・ウィルソン総督によると、昨年は四万五千人が海外へ流出したという。中間管理職、弁護士、医者、ビジネスマン、そういう香港の発展を支えた人たちが、毎月数千名の規模で出ている。一九九七年までに百万人出ると言われている。同時に、今、香港は、サッチャー首相や、香港を訪れたハウ外相に対して、三百二十万人と言われる……香港は属地主義ですから、そこでパスポートをとった人たちが、イギリスに居住させてくれ……こういう問題が出てきている。

それから香港の経済人は、ニュー・香港をオーストラリアのノーザンテリトリーのダーウィンの近くに作る、と。オーストラリアとカナダは、この際中國を非常に厳しく見ていまして、大使も召喚しました。従来、アメリカ以上に親中國的な政策をとっていたそのカナダや、オーストラリアがそこまで香港のことを考えている。

ということになると、ひょっとすると、香港は、中國に

ると、非常に危いのではないかという気がします。特に経済の破綻をどうやって補填するか。「ソ連がある」ということを楊尚昆たちは言っているようですね。その意味では、中ソ関係を改善しておいたことはよかったです。

ソ連は非常に深いジレンマに陥っているわけです。せっかくこれまで一生懸命にソ連の方からむしろ積極的に働きかけて、中ソ和解をしたにもかかわらず、しかもゴルバチョフは民主化の旗手として迎えられたにもかかわらず、こんなことをしている。

しかし、ソ連は中ソ関係はこわしたくない。そうかといって、鄧小平らのあの血の粛清をとでも認めるわけにはいかない。ここにソ連の迷いがある。

この迷いは、六月二十七日の人民日報を見ると、江沢民が総書記になった。私は江沢民は、とても今の中國共產黨を支えて行くこともできないし、ましてやこれだけ問題の多い中國を、彼がリーダーシップを発揮して行くことはできない。彼は、まさに血塗られた鄧小平、李鵬、楊尚昆政権のあやつり人形だと思います。いずれにしても江沢民が総書記になったときに、まず最初に、その日、及びその翌日に祝電を打ってきたのは、金日成ですね。朝鮮労働黨とドイツ統一社会黨、つまりホーネッカー、それからルーマニアのチャウシェスクが続く。それと、日本の宇野首相なんですね。ソ連は、二十八日まで祝電を打っていませんね。

帰るときには廃墟になっているかも知れないということがございます。

台湾の「社会反攻」「経済反攻」

それから台湾は、この間私行つて参りまして、李登輝総統ともお会いしてきたが、台湾はちょっと違います。もう六十万人も大陸近親訪問が続いているし、その血縁、地縁のネットワークで今ものすごく成功している台湾経験を、大陸に伝達して行くことが彼らの義務である。かつての「大陸反攻」と違って、まさに「社会反攻」「経済反攻」の時代である。

ですから、この事件が起こった直後には、台湾からのファックス、電話、郵便、テレックスすべてを解禁した。ワットと殺到した。そして、大陸の親類や縁者に台湾からの情報が入って行った。これはまさに台湾の自信の表れ。もう反共主義なんて宣伝しなくていい時代になってきております。

ジレンマに陥ったソ連

こういう外からのインプットがかなり今後の中國を変えて行くのではないか。今の体制というものが、果たして五年持つかどうか。私は、一つは鄧小平の年齢ということもあります。それ以外にも今の中國の経済の先行きを考え

友党であるソ連が四日間祝電を打たなかった。しかも和解したばかりのソ連が四日間打たなかったということに、今日のソ連との距離があります。

いま中國で評判がいい宇野さん

また、逆に言うと、今中國で一番評判がいいのは、金日成とホーネッカーと、チャウシェスクと、宇野さんであるということですね（失笑）。本当にそうなんです（笑い）。ですから、そういう位置にわれわれの総理があるのだということをこの際日本人はよく覚えておく必要がある。

そういう意味で、最も硬直したゴルバチョフでさえも眉をひそめるような独裁的な社会主義國が中國に同調している。それと日本の政府だということは、われわれどう考えるか。この点については、時間ありませんので、私はあえて意見を述べませんけれども、そういう現実が国際的にあるということですね。

海外に生まれた新しいアイデンティティ

最後に、今回の事件は、大変な悲劇をもたらしましたが、一方でたとえば香港、台湾、あるいはロンドン、パリ、ニューヨーク、東京……中國人の中に一方では新しいアイデンティティ（主体性）というのでしょうか、本当に中國、こんなことでどうするんだ……という声がわき上がった。

アジア時報

ISSN 0288-0377

1989.9



The Asian Affairs Research Council

特集 激動の中国 第2弾

〔時評〕天安門事件と今後の中国

東京都立大学教授 岡部達味

〔緊急講演会〕中国・新世紀への胎動

米・国際ジャーナリスト ハリソン・E・ソールズベリー

〔緊急講演会〕中国はどこへ行く

東京外国語大学教授 中嶋嶺雄

〔論文〕否定された鄧小平の“洋務論”

帝京大学講師 伊藤喜久藏

〔特別講演会〕

1992年ECの統合と日本の対応

前駐仏大使、野村證券常任顧問 本野盛幸

社団法人 **アジア調査会** (毎日新聞社内)

アジア時報

一九八九年(平成元年)九月号

アジア調査会

連邦制にしないとムリの声

それは具体的には、密告電話に妨害ラッシュが走ったということにも表れるように、そういう新しいアイデンティティが、中国人社会の中に生まれつつあって、もうあの巨大な人口で、経済が混乱している社会を、非常にタテ割りの硬直した共産党だけではどうしようもないということが、非常に大きなコンセンサスになってきているというような気がします。

そういう意味では「中華人民共和国」から、「中華連邦共和国」ということにでもしない限り、この国は救えないだろうというある種のコンセンサスが、今回抑えつけられた知識人や、あるいは台湾、香港、あるいは外にいる人たちの間からも生まれつつある。まさに二十一世紀にかけて今の体制で中国を維持して行くことはとても無理だとするならば、やはり新しい中国改造案みたいなものがいろいろ語られ始める時期になってきているのではないか。

その意味では、今回の事態は、まさにフランス革命二百年にして、一方では国家とか、暴力とかの持つ意味を真剣にわれわれにつきつけました。

同時に、革命というものはいかにコストが高いか。革命をやって社会主義になったけれども、結局経済はうまくいかない。民族の解放はできない。平等どころか、不平等が

進んでいる。ますます国家が死滅するどころか、どこを見ても、国家というものがすごい形でのしかかっているわけです。

そういう意味では、二十一世紀というものは、マルクス主義はいかにコストが高くて、犠牲が大きいということをおわれわれに教えたわけですから、そういう意味でも今フランス革命二百周年が、中国のこの血の粛清によって祝祭されるという現実の中で、われわれはもう一ぺん革命とか、社会主義とか、あるいは国家とか、暴力というものを考え直してやる必要があるかという教訓を残したということを経験して、最後に申し上げ、私の率直な意味を述べさせていただきます。

(拍手)

|| 文中敬称略 ||

(平成元年七月十九日の東京・如水会館におけるアジア調査会主催の緊急講演会の速記録 || 文責、編集部)

